



道路
見物

ストラースブルヒの思ひ出

道路改良會理事
岡山縣知事

佐 上 信 一

數日の淹留に旅塵を拂つたバーテンバーデンの温泉場を出發して、エルザス、ロートリンゲン
の首府なるストラースブルヒに行くことゝした。バーテンバーデンの雨の景色も捨て難く、雨脚ペー
ブ

メントの上を躍る間を自動車を疾驅して停車場に向ふ。田舎のホテルは、番頭に至るまで使用人の頭が低い。吾等が自動車の影を没する迄、戸に佇んで左様なら道中を御無事になど別れの言葉を口々にハンカチーフを振つて居る。假の宿とは云へ、後に心が惹かれて再遊の念が自から湧いて来る。ストライプブルヒ行ききの汽車も、切符はケール迄しか賣らない。同室に佛蘭西人の一家族が乗り合せた。可愛らしい兄なる子が眠い眼をした妹と、繪入雑誌を圍んではいやいで居る。車窓から見ると雨に罩つた南獨逸の農村は、誠に落着があつて伯林など、較ぶれば平和の神の恩寵を獨占して居るやうな心地がする。唯車内では佛蘭西語を聴くこと次第に多く、何だか獨逸を遠ざかつて異國にでも行くやうな心寂しさがある。

二

汽車はケールに到着した。ケールは萊因川を隔て、ストライプブルヒと相對する町で、ストライプブルヒが獨逸領の時代には、兩地間は市街軌道で連絡されて居つた程の所だ。萊因川には萊因橋が架つて居る。獨逸の境界は萊因川の獨逸寄りの川岸を基準として居るので、橋頭には佛蘭西の三色旗が勢よく風に翻つて居る。橋の袂には獨逸の官吏が出張して、旅券の検査を爲し、佛蘭西側から来る自動車には通行税を課して居る。又之と接して橋の入口には佛蘭西兵が構えて居つて、旅券の検査をする。獨逸製の寫真器の通關には、相當骨が折れた。ケールの人がストライプブルヒに日常の買物に行くにも、一々旅券を提示して許可を受けねばならぬ。其の様子が、何となく、我が昔の箱根

の關所を思はしむる様であつた。

三

雨ほストライズブルヒあたりで晴れた。萊因橋を渡つてス市に至る間は今は何等の交通機關もないので、雨に濡れた道路を徒歩で行くの外はない。佛蘭西は多年の希望を達して、エルザスロートリンゲンを自國の領土に恢復するや、先づ第一着手として從來の道路標識を佛蘭西風に變更すると同時に、哩程標の如きも全く佛蘭西の石標の頭を赤く塗つたものに變更し、之に巴里から起算してストライズブルヒに至る哩程を記入した。此の如きは一面佛蘭西人が他國人から動もすれば神經過敏なりとの評を受くるに値する遣方ではあるが、又一面に如何に佛蘭西が道路を尊重し、道路標識や哩程標の變更に依つて、ス市在住者を佛蘭西化することに努力しつゝあるかを示すに足るものと示はなければならぬ。エルザスロートリンゲンの地は、久しく獨逸の領土に屬し、獨逸は之を獨逸聯邦の直轄として、各種の施設に依つて、其の獨逸化に努めた土地柄とて、再び之を佛蘭西化することは、海に容易な業ではない。佛領となつて以來、商店の賣子などは、佛蘭西語を用ふるも、買手が獨逸語を用ふれば、賣子は佛蘭西語以上に上手な獨逸語で、之に應對する。土地の人も表面は佛蘭西語を使用して居るが、陰には中々盛に獨逸語を使用して居ると云ふことだ。佛蘭西の同化政策も、言語や風俗までも易えて行かうと云ふには相當の歲月と努力とを要するであらふ。

四

アルト、フイシユ、マルクト街には獨逸の詩聖ゲーテが學生時代に住むだ家がある。第三十六番戸の二階には、金屬板の標札を掲げ、之に「千七百七十年より千七百七十一年迄ゲーテ茲に住めり」と記されてある。極めて粗末な二階建て階下はコルセットを賣る商店である。都市計畫施行の際、此の個所改修が問題となつたが、此の如き由緒ある家屋を破壊しなければならぬと云ふことは遺憾な次第である。と云ふので、此の部分だけ今に狭いまゝに残されてあるのも奥床しい限りだ。之が日本であつたなら、史蹟であらうが、名勝であらうが、神社であらうが、寺院であらうが、道路改修の前には何等存在の價値を主張することを許されぬのであらうが、諸外國では此等の點は仲々うまく行つて居つて、土木事業と史蹟との關係が程よく調和を保たれて居る。

五

ストラースブルヒの町名、街路名にして、獨逸領有時代に附せられたものは、佛蘭西領となつて以來、殆んど悉く之を變更して居る。中には獨逸名の上に線を引き、其の側に佛蘭西名を書いて居るやうなものもある。獨逸領有時代に皇帝通りカイザー通りと云ふ名を附せられた街路は、佛蘭西領となつてから自由通りリベラーと變更されたなどは面白い。只横丁の小通ゴツセツは、獨逸領有時代其のまゝの町名が残つて居るやうな所も少くなかつた。之に依つて見ても、街路名町名等は、我が國では比較的軽く無頓着に取扱はれ

つつあるやうではあるが、彼にあつては、可なり重大問題として極めて慎重に取扱はれつゝあると云ふことが知られる。

六

ストライスブルヒも同様であるが、獨逸の大小の都會は舊時に於ては多くは王城を中心として、其の都市計畫を遂行して居る。現にストライスブルヒの如きも王城を中心とし、王城廣場を隔て、壯麗無比の大學の建物がある。此のあたりが所謂都心シティセンターになつてゐるのである。然るに現代的都市にありては、其の都市計畫を遂行するに、鐵道停車場を中心とする風が盛になつて來た。鐵道停車場の附近には、之を中心として立派なる旅館が櫓を連ね、大小の店舗は、之を環つて建てられて居る有様である。我が國では鐵道停車場附近の宿に泊ることは、安宿に泊ると云ふことの代名詞になつて居るやうであるが、彼にありては全く之と事情を異にして居るのも珍らしい。

七

名高き寺院の殿堂や、珍奇なる髮飾を爲せるアルサスローレンの婦人に驚きつゝ、再び萊因橋を渡りて、獨逸領内に歸れば、萊因の流れは滔々として晝夜を捨てず、之を挾むで解くることなき恨を懷ける獨佛の兩國が永久に勝ちつ敗れつして相對峙せるを見ては、人類の平和の何時來るかと斷定し難いやうな心持がする。ストライスブルヒの道路見物も、獨佛の様々なる對抗に興味を削がるゝことと少なからず、其の日の夜汽車でフライブルクに到着して、枕の下に涼々なる水音を聴きながら、靜かなホテルの一室に横たはつて、初めてホット息をついた。